

翻訳——来るべき諸言語の姿を 映し出す実践の研究

インターネットの世界的な発達、言葉の流通様態を世界規模で変えつつある。個人にとって、社会にとって、来るべき多言語世界はどのような姿で現れるのだろうか。翻訳の現場を通して新しい多言語世界のかたちを見る。



影浦 峽 / 文
大学院教育学研究科 教授
<http://panflute.p.u-tokyo.ac.jp/~kyo/index-j.html>

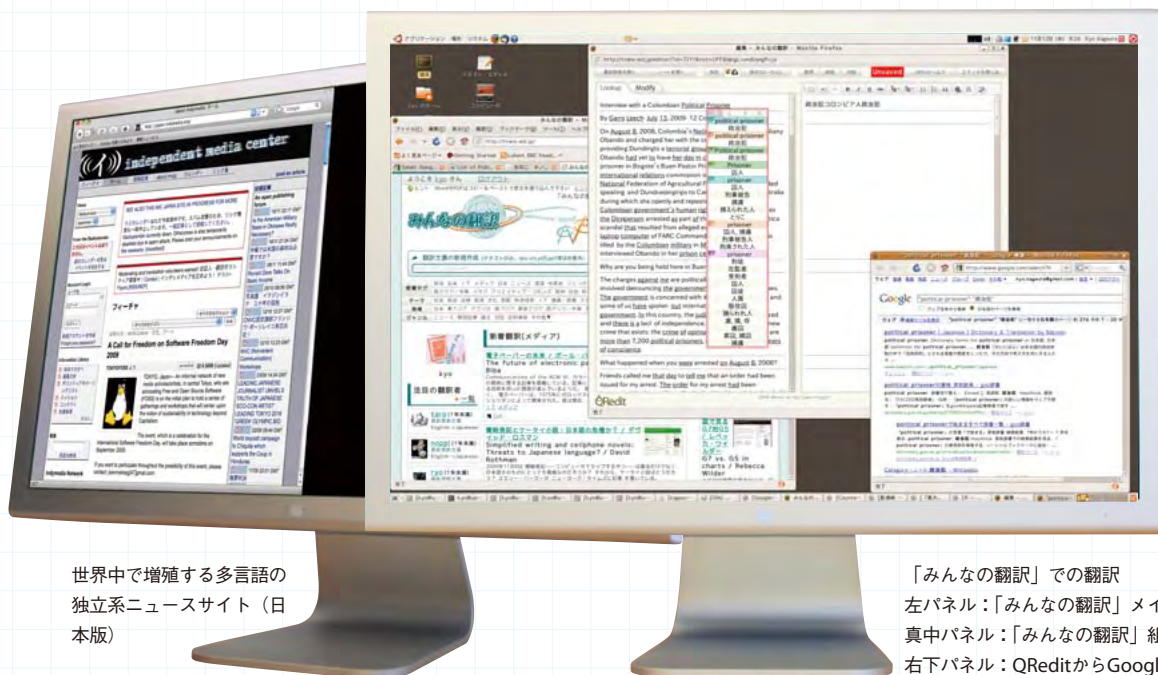
私 たちが今話している日本語は、いつ頃できたのでしょうか。冷静に考えれば、19世紀後半にできたことは明らかです（誰も江戸時代の人々のような言葉は使っていませんし、19世紀半ば以前の「日本語」は、古語として別扱いはされるくらいですから）。このとき、語彙だけでなく文構造の形成にまで大きな役割を果たしたのが、翻訳でした。実は、日本語に限らず、ドイツ語やフランス語なども含めて、よく知られている言語の多くは、翻訳による書き言葉を基盤としてできたものです。これらの言語が概ね「国」に対応して一様に広まったのは、辞書や新聞、雑誌、図書などが言語の参照軸となり、「国」中に流通したこと、また、そうした言語が教育を通して一様に教えられたことによります。それ以前、言語は、混ざったり分かれたりを繰り返しながら、はるかに多様な姿を見せていました。言語は本来的に雑種の、一定の軸がなければ、どんどん姿を変えます。ところで、今。新聞も雑誌も本も読まれな

くなる一方、ネットの発達により多言語の情報流通が国境を越えて進み、機械翻訳された文書がネット上に現れ、自分の関心分野について複数の言語で文章を読む人も増えていきます。キノコマニアの小学生がネットで世界各地のキノコサイトにアクセスし、キノコ情報を数言語で読みこなし、といったケースも現れています——彼女にとっては「数言語」という感覚さえないかもしれません。情報技術の展開とともに、「日本語」「スワヒリ語」といった言語の境界を維持していたこれまでの参照軸が、少なくとも一部で解体しつつあるのです。これから、日本語は、世界の言語編成は、そしてコミュニケーションは、どうなるのだろうか？ ここで再び、翻訳の登場です。一見したところ言語の垣根を前提としたコンサバな活動に思える翻訳ですが、言語の創成に重要な役割を果たしてきたことからもうかがえるように、新たな言語表現の編制と流通の中で来るべき言語の姿を示す先端の現場だ、私たちは翻訳をこう捉えています。特に注目

しているのは、ネット上で進む翻訳です——言語表現の新たな流通は主としてネットが可能にしたものですから。

新しい言語とコミュニケーションのかたちを映し出す翻訳の現場を捉えるために、私たちは、オンライン翻訳支援とホスティングのサイト「みんなの翻訳」(<http://trans-aid.jp/>)を開発・公開し、運用しています。言語処理技術を活用し、Web 2.0的機能も取り入れた実験的なサイトですが、使われなければ意味はありませんから、オンライン文書を訳したり読んだりする人々が便利に使えるようになっています（アムネ스티・インターナショナルやデモクラシー・ナウなどのNGOも使っています）。ぜひ登録して使ってみてください。

コトバは実験室での実験ができませんし、変化にも長い時間がかかる対象なので、私が研究を続ける間に大きな結果が得られることはないかもしれません。それでも無性にわくわくする。未来に向けて翻訳を考えることには、圧倒的な魅力があります。



世界中で増殖する多言語の独立系ニュースサイト（日本版）

「みんなの翻訳」での翻訳
左パネル：「みんなの翻訳」メインページ
真中パネル：「みんなの翻訳」組込みの翻訳支援エディタQRedit
右下パネル：QReditからGoogleを呼び出して調べ物